東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

文法関係と格助詞との対応が格助詞の使用に及ぼす影響：少数事例の予備的検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部 公開日: 2024-03-11 キーワード (Ja): 格助詞, 文完成課題, 文法性判断課題, 定型発達児, ETYP: 教育関連論文 キーワード (En): case marker, sentence completion task, grammatical judgment task, children with typical development 作成者: 村尾, 愛美 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000262

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　75：229－236, 2024

文法関係と格助詞との対応が格助詞の使用に及ぼす影響

―― 少数事例の予備的検討 ――

村　尾　愛　美*

支援方法学分野

（2023年9月20日受理）

1．はじめに

従来から，言語発達障害児を対象とした言語研究において，格助詞の使用の困難さが指摘されている[1～4]。言語発達に遅れを呈する知的障害児や聴覚障害児においても，上記の困難さが報告されている[5～10]。さらに，失語症に見られる統語障害である失文法においても，格助詞の省略や置換はよく知られている[11, 12]。また，定型発達の幼児においても，格助詞の誤用が見られることが従来から指摘されている[13, 14]。

これらのことから，障害の有無や種類を問わず，日本語において格助詞は困難な文法項目であるといえる。では，この格助詞の使用に影響を及ぼしているものは何だろうか。

長谷川[15]は，生成文法理論の考えから，文の構築を三つの段階で捉えている。生成文法理論では，述語が必要とする必須の名詞句を項といい，格助詞はこの項を示す役割をもつ。また，文の中でその名詞句が担う意味機能を意味役割といい，意味役割のリストのことを項構造と呼ぶ。たとえば，「女の子がりんごを食べる」という文では，「食べる」という動詞の項構造は［動作主］という意味役割と［対象］という意味役割からなる。この項構造は，文の基本的な意味関係を特定するレベルとなる。その上のレベルに文法関係（「主語」「目的語」など），さらに上に構造関係（「名詞句」「動詞」など）のレベルがあるという[15]。

柴谷[16]は，文法関係と格助詞（柴谷[16]では，それぞれ統語範疇と格範疇という）「が」「を」「に」の対応を**図1**のようにまとめている。

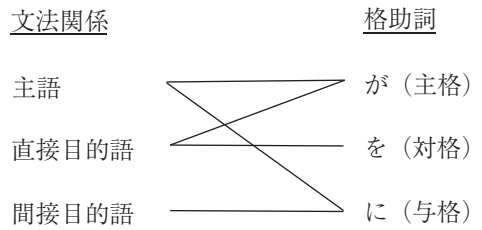

図1　文法関係と格助詞との対応（柴谷[16]より作成）

このように，柴谷[16]は，文法関係と格助詞は一対一の絶対的な関係にないと指摘している。竹沢[17]は，文法関係と格表示の対応について，一般的な原則からはずれた場合を「文法関係と格のずれ」と表現している。このような，ずれを生じさせる動詞として，状態動詞と可能動詞がある。

状態動詞とは，状態述語の一つである。状態述語とは，可能性，必要性，所有，認識／知覚，感情等に関する状態性を表す述語であり，「わかる」や「できる」などがその例である[17]。例えば，「一郎に英語がわかる」という文では，「一郎に」は主語であるが「に」格で示され，「英語が」は目的語であるが「が」格で示される。また，状態述語構文と類似した現象を示すのが，可能構文である。可能構文は可能形態素「られ（る）」（(rar)e(＋ru)）を含む複合動詞構文である[17]。例えば，「二郎に英語が話せる」では，上記同様，主語は「に」格で示され，目的語は「が」格で示される。また，可能動詞構文と同様に動詞の形態的変化との関係では，受動文においても，上記のような標準的な対応からのずれが見られる（例：三郎に四郎が追いかけられる）。

このような文法関係と格助詞との標準的な対応から

＊　東京学芸大学 特別支援科学講座 支援方法学分野（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）

のずれは格助詞の使用に影響する可能性がある。そもそも，このような構文における格助詞について，定型発達児はどのような表出と理解の特徴を示すのだろうか。そこで本研究では，上記の可能性を検討するために，まず，定型発達児少数例を対象として，状態動詞文，可能動詞文，受動文における格助詞の表出と理解の特徴についての予備的検討を行うことを目的とする。

２．方法

２．１　対象

小学２～５年生の児童７名を対象とした。この７名の生活年齢の平均は９歳４か月であり，語い年齢の平均は11歳４か月であった。この７名について，保護者へ生育歴等の聞き取りを行い，知的発達や言語発達の遅れがないことを確認した。なお，本研究の言語課題は文字で提示されるため，学校教育での文字の読み書きの学習から１年が経過した小学２年生以上を対象とした。

本研究は，東京学芸大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施したものであり，対象児の保護者から書類による同意を得て行われた。

２．２　言語課題

２種類の言語課題と絵画語い発達検査（PVT-R）を行った。２種類の言語課題は，文完成課題の一種である格助詞挿入課題と文法性判断課題であった。格助詞挿入課題は，Muraoら[3]を参考に作成したものである。線画と刺激文の内容が一致するよう，二つの空欄に「が」「を」「に」のいずれかを挿入するものであった。**表１**は課題で用いた刺激文を示している。刺激文は，①状態動詞文，②可能動詞文，③受動文が各４文，④ダミーの文が２文，計14文であった。**表１**から明らかなように，①状態動詞文では，「が･が」と「に･が」の２通りの格配列が考えられる。また，②可能動詞文は，「が・が」，「が・を」，「に・が」の３通りの格配列が考えられる。なお，「に・を」の格配列は存在しないとされる[17]。

文法性判断課題は，格助詞挿入課題で使用した４種類の刺激文のみを用いて，つまり，線画は使用せず，①②③はそれぞれ正文と非文を各４文，④は正文と非文を各２文，計28文を用いた。非文は，格助詞のいずれか一方が誤った文とした（例：ぶたさんが　さかだちに　できる）。

２．３　手続き

格助詞挿入課題，文法性判断課題ともに，刺激文ごとにA４用紙１枚に印刷し，冊子状にして対象児に提示した。刺激文はランダムに提示された。格助詞挿入課題では，空欄を補充した後，対象児に完成した文を音読するよう求めた。文法性判断課題では，まず，刺激文を音読するよう対象児に求めた。その後，正しい文には「○」を，誤っている文には「×」をつけるよう指示し，各刺激文について正誤判断を求めた。さらに，「×」とした場合は，間違っていると思うところに下線を引き，その下に正しいものを書くよう指示し修正を求めた。

福田ら[2]を参考に，いずれの課題においても，分

表１　課題で用いた刺激文

文の種類	刺激文
①状態動詞文	いぬさん（が／に）*　じかん（が）わかる ぶたさん（が／に）　さかだち（が）できる ねこさん（が／に）　えいご（が）わかる ぱんださん（が／に）　なわとび（が）できる
②可能動詞文	うさぎさん（が／に）　水たまり（が／を）とべる いぬさん（が／に）　とびばこ（が／を）とべる ねこさん（が／に）　カタカナ（が／を）よめる ぶたさん（が／に）　かん字（が／を）よめる
③受動文	うさぎさん（に）　ぶたさん（が）おされる いぬさん（に）　ねこさん（が）おされる ぶたさん（に）　ねこさん（が）おいかけられる ねこさん（に）　ぱんださん（が）おいかけられる
④ダミー文	いぬさん（が）　うさぎさん（を）なでる ぱんださん（が）　ぶたさん（を）なでる

*　括弧内は期待される正反応を示す。

からないときは「△」を記入することを指示した。これは，倫理的な配慮のためと，特に格助詞挿入課題について，日本語では格助詞の省略が許されるので，省略のための空欄か解答が導けないことによる空欄かを判断できるようにするためである。また，「は」は使用できないことも対象児に説明した。日本語では,「が」や「を」の代わりとして「は」を用いても文が成立するが，本研究では，格助詞「が」「を」「に」と文法関係との対応に視点を当てるため，「は」は使用できないこととした。

各課題において，まず実験者である著者が見本を示し，次に練習課題を行い，対象児が課題の手順を理解したか確認した上で本課題を実施した。

本研究では，格助詞挿入課題，絵画語い発達検査（PVT-R），文法性判断課題の順に個別に行った。なお，対象児の手元のみをビデオカメラで撮影し，対象児の発話をICレコーダーで録音することによって，課題実施時の対象児の様子を分析の補助的な情報として収集した。

２．４　分析方法

格助詞挿入課題については，まず，文中に含まれる二つの空欄ともに正答した場合，その文を正答したとみなし，文単位で正答率を算出した。先に述べたように，①状態動詞文と②可能動詞文はいくつかの正答が考えられるが，どの格配列であっても正答であれば正答とみなした。次に，挿入された助詞の特徴を分析した。

文法性判断課題については，まず，正誤判断が正しいか否かで文単位で正答率を算出した。例えば，可能動詞文において，正文（例：ぶたさんに　かん字が　よめる）を非文と判断し，「ぶたさんが　かん字が　よめる」と修正したとしても，正非の判断が誤っている場合は誤答とみなした。次に，誤答が見られた文を対象として，修正の特徴を分析した。

３．結果

３．１　課題別の正答率の比較

図２は対象児ごとの課題別の正答率を示したものである。対象児は語い年齢が低い順に左から右へ配列されている。なお，本研究では，語い年齢の順と生活年齢の順が一致していた。C児は両課題の正答率が同程度であり，その他の対象児は文法性判断課題のほうが格助詞挿入課題に比して高い傾向があった。格助詞挿入課題における平均正答率は54.1％（35.7～71.4）であり，文法性判断課題における平均正答率は72.4％（57.1～85.7）であった。ダミーの文は，文法性判断課題において対象児２名（A児とF児）がそれぞれ１文ずつ誤るのみであった。t 検定の結果，文法性判断課題の平均正答率は格助詞挿入課題の正答率に比して有意に高かった（$t(6) = 3.75, p < .01$）。

３．２　格助詞挿入課題における文の種類別の平均正答率

図３は格助詞挿入課題における文の種類別の平均正答率を示したものである。状態動詞文の平均正答率は可能動詞文や受動文に比して低い傾向にあった。

A児は誤答が見られた９文中５文で１番目の空欄に「△」を挿入し，残りの４文では１番目と２番目の空欄にそれぞれ「が・を」を挿入した。B児についても，誤答が見られた８文中７文で１番目の空欄に「△」を挿入し，残りの１文では２番目の空欄に「△」を挿入した。C，D，G児については，誤答が見られたすべ

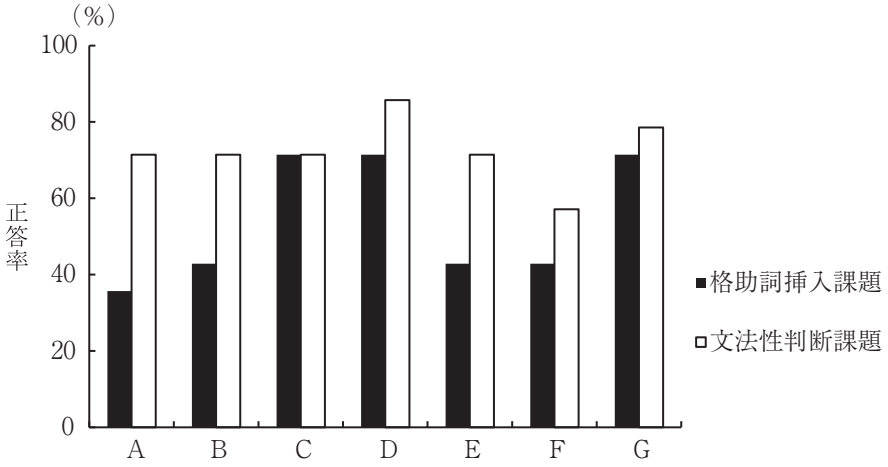

図２　対象児ごとの課題別の正答率

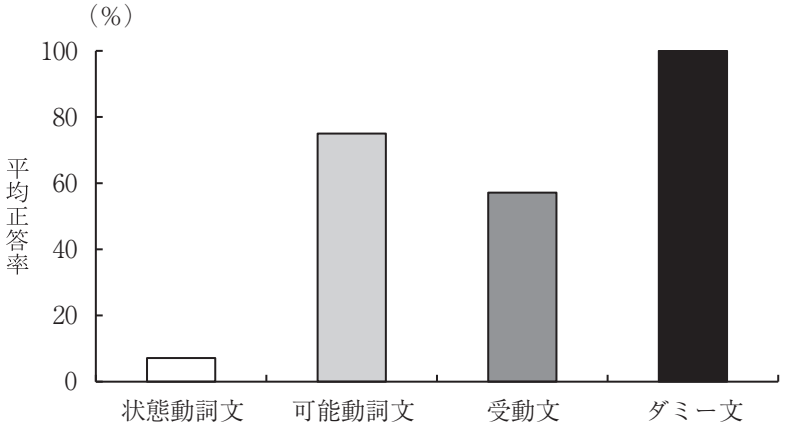

図３　格助詞挿入課題における文の種類別の平均正答率

ての刺激文で１番目と２番目の空欄にそれぞれ「が・を」を挿入した。E児は，誤答が見られた８文中半数は１番目と２番目の空欄にそれぞれ「が･を」を挿入し，半数は「に・を」を挿入した。F児は，誤答が見られた８文中６文で１番目と２番目の空欄にそれぞれ「が･を」を挿入し，残りの２文では「が･に」を挿入した。

３．３　文法性判断課題における文の種類別の平均正答率

図４は文法性判断課題における文の種類別の平均正答率を示したものである。状態動詞文と可能動詞文の正文の正答率が低い傾向にあった。４（文の種類）×２（正文・非文）の２要因の分散分析を行った結果，交互作用が有意であった（$F(3, 18) = 9.60, p < .01$）。そこで，各要因の単純主効果を分析した結果，正文における文の種類間，状態動詞文および可能動詞文における正文と非文間に有意差が見られた。正文における文の種類の単純主効果について，Holm法を用いた多重比較を行った結果，状態動詞文と可能動詞文との間，受動文とダミー文との間を除く文の種類の間では有意差が認められた（$MSe = 652.28, p<.05$）。

誤答の特徴を見ると，D児は誤答が見られたすべての刺激文において，G児は誤答が見られた６文中５文において，A児，C児，E児は誤答が見られた８文中４文で，B児とF児は誤答が見られた８文中３文で，別の正答である格配列へ修正していた。誤と判断し修正した後，修正した文が「が・を」となる反応のみであったのは，F児のみであった。

４．考察

学齢期の特異的言語発達障害（specific language impairment: 以下SLI）児および定型発達児を対象として，格助詞挿入課題（能動文と受動文で構成）を

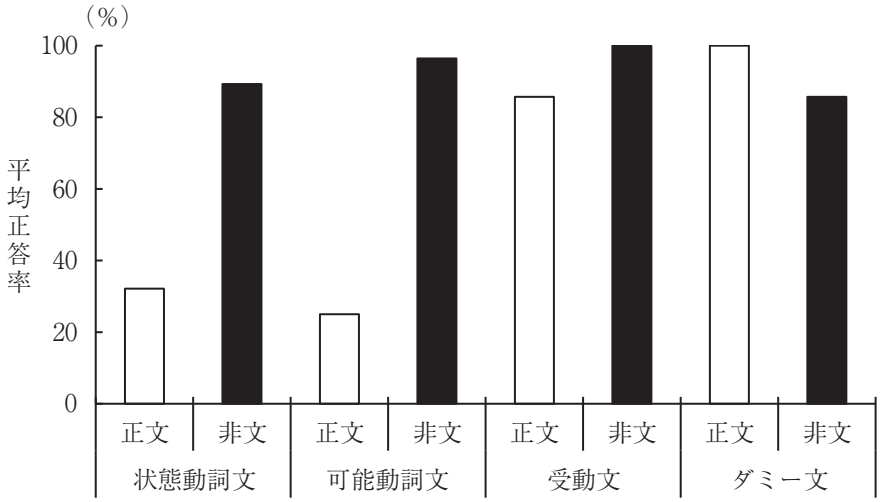

図４　文法性判断課題における文の種類別の平均正答率

実施したMuraoら[3]では，定型発達児の平均正答率は85.3%であった。これに対して，本研究の格助詞挿入課題における平均正答率は54.1%と低い傾向にあった。さらに，本研究では，ダミー文の誤りは両課題とも少なく，特に，状態動詞文の正答率が低い傾向にあった。このことから，文法関係と格助詞との標準的な対応からのずれは格助詞の使用に影響を及ぼす可能性が示唆された。

格助詞挿入課題では「が・を」とする反応が多い傾向にあったが，すべて「が・を」と反応する対象児は観察されなかった。また，判断課題においても，「が・を」とする修正のみであったのは，F児のみであった。ただし，F児には「ぱんださんに　なわとびが　できる」（正文）や「ねこさんに　えいごが　わかる」（正文）のような「に・が」の格配列を正文と正しく判断した反応も観察された。このことから，本研究の対象児は標準的な格配列である「が・を」をストラテジー的に使用した可能性は低いと考えられる。また，格助詞挿入課題において，分からないときに使用する「△」を挿入したのは，語い年齢／生活年齢が低いA児とB児の２名であったが，その２名ともに「△」は１番目の空欄に挿入する傾向にあった。この結果から，対象児は１番目の名詞句は「が」という名詞句の順序を手掛かりとしたストラテジーに依存している可能性は低いことも考えられた。これらのことから，本研究の対象児は刺激文内の名詞句が［動作主］と［対象（または被動作主）］という意味を担っていることは理解していたと推察される。

相澤・吉野[18]は小学生および高校生の聴覚障害児，健聴児を対象として，反応時間を指標とした文法性判断課題を実施し，対象児の文処理過程を検討した。その結果，聴覚障害のない小学生および高校生，聴覚障害のある高校生の３群は，意味情報（動詞のもつ意味的制限，つまり，項になり得る要素の正誤）と統語情報（格助詞の正誤）が異なる際に反応時間が遅れるという特徴を示した。さらに，意味が正しく格助調が誤っている条件で反応時間が増加することを示した。本研究の文法性判断課題の非文は，相澤・吉野[18]でいう意味が正しく格助調が誤っている条件にほぼ等しい。一方，正文については，意味が正しく格助詞も正しい条件にほぼ等しいが，本研究では正文のほうが正答率が低かった。このことから，意味情報と統語情報の相違とともに，文法関係と格助詞のずれも文処理に強く影響を与えていると考えられる。

文法性判断課題では，状態動詞文の正文と可能動詞文の正文が同程度に低い傾向にあった。ではなぜ，正文の方が低い傾向になったのだろうか。その理由の一つとして，状態動詞文と可能動詞文では，正文であるにもかかわらず誤と判断し，それ以外の正答の格配列へ修正する反応が多い傾向にあったことが影響したと考えられた。

一方，可能動詞構文と同様に複合動詞構文と扱うことができる受動文の正文はダミー文の正文と同程度の正答率であった。特異的言語発達障害児および定型発達児を対象として格助詞挿入課題を行った村尾・伊藤[19]においても，言語学的に能動文に比して困難だと考えられる受動文の成績が能動文の成績と差がないという結果が得られている。村尾・伊藤[19]ではディフォルトまたはストラテジーとして「に」が挿入されたことによって，受動文の正答数が増えた可能性が指摘されている。本研究においてもその可能性は考えられ，状態動詞や可能動詞おいても当てはまるはずである。しかし，ダミー文の正文と同程度の正答率を示したのは，受動文の正文のみであった。この理由については，他のタイプの刺激文（使役文や授受文など）を含む検討を行うことで今後明らかにしていきたい。

また，文法性判断課題の結果から，学齢期の定型発達児であっても，このような構文の正非の判断が難しいことが示された。従来から，言語の困難さを有する障害種において，文法面の困難さを評価する課題の一つとして文法性判断課題が用いられてきた[20~22]。SLIにおいても，文法性判断課題が学齢期以降のSLIの同定に有効である可能性が指摘されている[23]。文法性判断課題は文完成課題のような産出課題に比して，実施時間が短く手順も容易で対象児への負担が少ない。この点で，学齢児において，言語の特に文法面を簡易的に評価する方法として文法性判断課題が有効である可能性がある。また，格助詞に視点を当てる場合は，文法関係と格助詞との対応が標準的な文のみならず，それにずれを生じさせる状態動詞文や可能動詞文も刺激文に加えることも有効であると考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただきました，対象児の皆さまと保護者の方々に深く感謝申し上げます。

本研究の一部は，日本特殊教育学会第61回大会にて発表されたものである。本研究は，日本学術振興会科学研究費（若手研究），課題番号21K13613の資金の一部を用いて遂行された。

文献

1）石田宏代：特異的言語発達障害児の言語発達 ― 臨床の立場から ―．音声言語医学，44: 209-215, 2003.

2）福田真二，Fukuda SE，伊藤友彦，他：日本語を母語とする特異的言語障害児における格の文法障害. 音声言語医学，48: 95-104, 2007.

3）Murao A, Ito T, Fukuda SE, and Fukuda S : Grammatical case-marking in Japanese children with SLI. Clin Linguist Phone, 31, 711-723, 2017.

4）村尾愛美，松本（島守）幸代，伊藤友彦：特異的言語発達障害児２例における格助詞の誤用の特徴 ― 構造格と内在格の視点から ―．音声言語医学，53: 194-198, 2012.

5）利倉　章，黒田吉孝：知的発達遅滞児の助詞習得に関する研究 ― ダウン症M児の事例研究を中心に ―．滋賀大学教育学部紀要人文科学・社会科学・教育科学，39: 59-74, 1989.

6）斉藤佐和子：ダウン症児者の構文能力．音声言語医学，43: 196-199, 2002.

7）Koizumi M, Saito Y, and Kojima M : Syntactic development in children with intellectual disabilities: Using structured assessment of syntax. J Intellect Disabil Res, 63: 1428-1440, 2019.

8）伊藤友彦：聴覚障害をもつ幼児２名に生じた格助詞の誤用と構造格・内在格．言語探究の領域 ― 小泉保博士古稀記念論文集 ―（上田　功，他編）．大学書林，東京，43-51頁，1996.

9）伊藤友彦：聴覚障害児における格助詞の誤用 ― 言語学的説明の試み．音声言語医学，39: 369-377, 1998.

10）澤　隆史：聴覚障害児の作文における格助詞の使用と誤用 ― 深層格の視点から ―．音声言語医学，51: 19-25, 2010.

11）神尾昭雄：失語症における言語学的側面 ― 失文法の言語分析．失語症研究，6: 1131-1136, 1986.

12）藤田郁代：統語障害 ― 日本語の失文法 ―．高次脳機能研究，33: 1-11, 2013.

13）藤友雄暉：子どものことばの研究（１）．北海道教育大学紀要（第一部C），教育科学編，28: 59-63, 1977.

14）伊藤克敏：こどものことば　習得と創造．勁草書房，東京，1999.

15）長谷川信子：生成日本語学入門．大修館書店，東京，1999.

16）柴谷方良：日本語の分析．大修館書店，東京，1978.

17）竹沢幸一：格の役割と構造．中右　実（編）日英語比較選書９　格と語順と統語構造. 研究社，東京，2-102頁, 1998.

18）相澤宏充，吉野公喜：聴覚障害児の文法性判断における意味情報の役割．心身障害学研究，22: 19-27, 1998.

19）村尾愛美，伊藤友彦：特異的言語発達障害児の文完成課題における格助詞の使用の特徴．音声言語医学，62: 39-45, 2021.

20）藤田郁代：失語症患者の構文の理解障害に対する情報処理的アプローチ．失語症研究，13: 165-173, 1993.

21）Bellugi U, Marks S, Bihrle A et al: Dissociation between language and cognitive functions in Williams syndrome: Language Development in Exceptional Circumstances (edited by Bishop D and Mogford K) , Psychology Press, New York, pp 177-189, 1997.

22）Rice ML, Hoffman L, and Wexler K: Judgments of omitted BE and DO in questions as extended finiteness clinical markers of specific language impairment (SLI) to 15 years: A study of growth and asymptote. J Speech Lang Hear Res, 52: 1417-1433, 2009.

23）Rice ML, Earnest KK, and Hoffman L: Longitudinal grammaticality judgments of tense marking in complex questions in children with and without specific language impairment, ages 5-18 years. J Speech Lang Hear Res, 1-25, 2023. https://pubs.asha.org/doi/pdf/10.1044/2023_JSLHR-22-00507（2023年９月18日閲覧）.

文法関係と格助詞との対応が格助詞の使用に及ぼす影響

―― 少数事例の予備的検討 ――

The Effect of Correspondence between Grammatical Relations and Case Markers on the Use of Case Markers:

A Preliminary Examination of a Small Number of Cases

村　尾　愛　美*

MURAO Aimi

支援方法学分野

Abstract

Regardless of whether a subject has a disability, understanding and expressing case markers has been reported to be a difficult grammatical item among Japanese-speaking subjects. This study focused on the correspondence between grammatical relations and case markers and conducted a preliminary examination of a small number of cases to investigate the underlying reasons for the incorrect use of case markers. The subjects were seven second- to fifth-grade children with typical development. To focus on the correspondence between grammatical relations and case markers, two types of tasks using state verbs, potential verbs, and passive sentences were conducted: a case marker insertion task, which is a type of sentence completion task, and a grammaticality judgment task. The results revealed that the mean percentage correct for the grammaticality judgment task was higher than for the case marker insertion task. In the case marker insertion task, the mean percentage correct for sentences with state verbs tended to be lower than other types of stimulus sentences. In the grammaticality judgment task, the mean percentage correct for sentences with state verbs and those of potential verbs tended to be equally low, especially in the percentage of correct responses to correct sentences. These results suggest that deviations from the standard correspondence between grammatical relations and case markers may affect the use of case markers. The results also indicated that even school-aged, typically developing children have challenges determining whether such constructions are correct or incorrect.

Keywords: case marker, sentence completion task, grammatical judgment task, children with typical development

Department of Support Methods for Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

* Tokyo Gakugei University（4–1–1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184–8501, Japan）

要　旨

格助詞の使用の困難さは障害の有無および種類を問わず報告されており，日本語において格助詞の理解および表出は困難な文法項目であるといえる。本研究では，文法関係と格助詞との対応に視点を当て，格助詞の誤用の背景に迫るために少数事例の予備的検討を行った。対象児は小学２～５年生の定型発達児7名であった。文法関係と格助詞との対応に視点を当てるために，状態動詞，可能動詞，受動文を用いた２種類の課題，つまり，文完成課題の一種である格助詞挿入課題と文法性判断課題を実施した。その結果，対象児の文法性判断課題の平均正答率は格助詞挿入課題の平均正答率に比して高かった。文の種類別の正答率をみると，格助詞挿入課題では，状態動詞文の正答率が低い傾向にあった。文法性判断課題では，状態動詞文と可能動詞文が同程度に低い傾向にあり，特に正文に対する正答率が低い傾向にあった。これらの結果から，文法関係と格助詞との標準的な対応からのずれは格助詞の使用に影響を及ぼす可能性が示唆された。また，学齢期の定型発達児であっても，このような構文の正非の判断は難しいことが示された。

キーワード：格助詞，文完成課題，文法性判断課題，定型発達児